

異質な文明が遷移・交錯、独特な文化的風土を創生する悠久なる歴史都市・イスタンブール（その2）

文明(文化遺構と歴史物語)の可視化と都市のアクティブ化

東京藝術大学美術学部建築科 講師 博士(工学) 河村 茂

3. 人類文明を創生する歴史都市 大地に刻まれた文化史を可視化するまち

文明の十字路、人の交流と物の交易の接点、そして異文化が共生するイスタンブールは、悠久な時の流れの中、ユーラシア大陸の裂け目としてのボスポラス海峡が、陸路(シルクロード)と海路とを交錯させ、文明の十字路として、西(キリスト教世界)と東(イスラム教世界)とを分け、北(ロシア)と南(アフリカ)とをつなぐ、独特の地勢を有し、この大地の上で異質な民族・宗教、政治・文化が遷移、創生・破壊・融和を繰り返しながら、人類三千年に迫る都市の歴史を形成、また二千年もの間、帝国の都として君臨、時代毎、ギリシア、ローマ、ビザンチンの**文化的価値高い遺構**を堆積していき、その上にエキゾチックなオスマン建築が、そして近年はアクティブな近代都市が乗っかり**世界最大の歴史都市**となっている。

地政学的優位性をもつこの地では、有史以来、民族や宗教又政治や文化の違いを乗り越え、政治家や軍人、旅人や商人など様々な人々の活動と交流が**コスモポリタン**を育て、**幾多の魅力的な都市物語**を織ってきた。**イスタンブール**は、そんな**異文化共生**のまちの特性を維持しながら、近代に入ってもなお新たに文化的魅力を加え、歴史的文化風土としての価値を増している。過ぎ去る時の忘れ物としての**文化遺構**と**大地の物語**を、市街の各所や人々の脳裏に刻むとともに、文化プログラムによりこれを可視化し続ける、国際的観光商業都市・イスタンブールは、「**ゆっくりに豊かに人類文明を育み、文化を創造する都市**」としての性格を今も持続している。

○異文化共生のまち コスモポリタンを育てるまち

歴史を辿ると、この地は、過去、ローマ帝国(330-395)、ビザンティン帝国(395-1204、1261-1453)、ラテン帝国(1204-1261)、オスマン帝国(1453-1922)と4つの帝国の首都として君臨してきた。そしてローマやビザンティン時代には、**キリスト教**発展の拠点としての役割を担ったが、1453年成立のオスマン帝国以降は**イスラーム教**中心へと変わった。

オスマントルコのメフメット二世は、国教をイスラム教に改めると、キリスト教の聖堂から十字架を撤去し代わりにミフラーブを加え、周囲に二本のミナレットを建てモスクとして整備した。しかし、キリスト教徒を排斥せず、東方正教やユダヤ教なども容認した。そしてヨーロッパへ進軍するにあたって、同様にそれぞれの民族が自らのコミュニティを保ち、そのアイデンティティを維持していくことを容認した。しかし、税だけはしっかりと徴収した。税を納めていれば迫

「地方創生」支援プロジェクト



害を受けることもなかった。また、オスマン帝国の官僚は、民族や宗教、身分などによって差別されることもなく、実力次第で出世もできた。

首都イスタンブールに強制的に移住させられた者も含め、この地の人々は、それぞれ民族や宗教の違いを踏まえ、時の経過とともに自然にまとまって暮らすようになっていった。イスタンブールは、そうして多くの民族・宗教がモザイク状に混り合う形で国際都市を形成していった。そうした意味でイスタンブールは、オスマントルコ成立時から「コスモポリタン」を育てる寛容な文化をもつ、グローバルシティを志向していたといえる。それではその契機となった、コンスタンチノーブルからイスタンブールへの政変について物語ろう。

(1) 物語「コンスタンチノーブルの陥落」 キリスト教国からイスラム教国へ

13世紀、アナトリア(小アジア)の小さな村から出た、オスマンという武将が起こした国が「オスマントルコ※」である。海が主要な交通・輸送路であった時代、オスマントルコはビザンチン帝国を攻略するにあたり、ボスポラス海峡の両岸にアナドル・ヒサル(1376年)とルメリ・ヒサル(1452年)の砦を築き、ヨーロッパとアジアを結ぶ通商路を押さえ、ビザンチン帝国の経済動脈を断ち切ったあと、城市へと進攻した。時は1453年、オスマントルコは10万を超える軍勢をもって、兵力約2万のビザンチン帝国の首都コンスタンチノーブルを包囲する。三方を海に囲まれたコンスタンチノーブル、その陸続きの西側には南北に6.5kmに渡り二重に城壁が築かれていた。この城壁、外壁は高さ8mで壁厚2m、内壁は高さ12mで壁厚は実に5mもあった。また、キリスト教徒であるジェノバ商人の船が、皇帝を守ろうと援軍を寄せやっていた。

オスマントルコは、この難攻不落の皇帝城を落とそうと、進攻の機会を窺った。実に8ヶ月間もである。オスマン側は皇帝城北側が最も弱いと睨んだが、敵もさるもので金角湾を太い鉄の鎖で閉鎖していた。そこでこの裏手の方から回り込むべく、夜半にジェノバ商人の居住区であるガラタ地区の背後を、山伝いに回り金角湾の奥に船を浮かべ、皇帝城へと攻め込んだ。このとき山を登るにあたり、オスマン軍がとった戦法は、実にユニークなものであった。彼らは山に丸太を敷き並べ、これに油脂を塗って船を引き上げ、そして金角湾へと引き下ろした。一方、コンスタンチノーブルの市民はアヤソフィア大聖堂に立てこもり、奇跡が起こるのをただひたすら祈っていた。しかし、奇跡はついに起こらなかった。

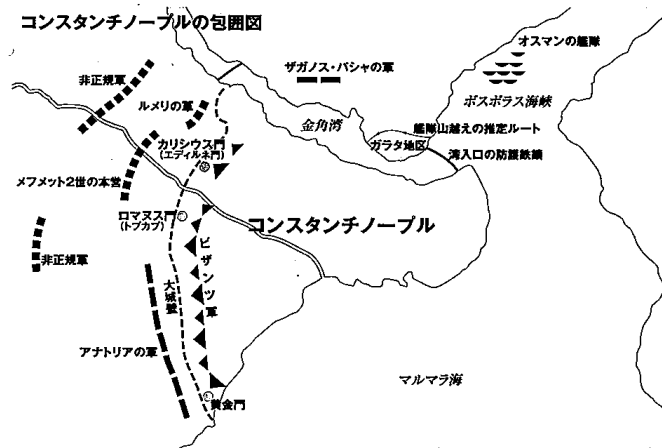
※トルコ族の一派で、元は中央アジアにあり、そこから一部が西へと移動し、セルジューク朝を建て、その拡大に伴いアナトリアの地に入り定着した。

「地方創生」支援プロジェクト





国旗



コンスタンチノーブルの包囲網

○深紅の下地に三日月と星

5月29日、ついに城は陥落、夕刻になると北西のアドリアノーブル(エディルネ)門から、オスマントルコのメフメット二世が馬に乗って入城する。この瞬間、この地がキリスト教徒が支配するビザンチン帝国から、イスラム教徒が支配するオスマン帝国へと変わる歴史的瞬間であった。

メフメット二世が門をくぐり城内に入り最初に目にした光景は、路上に突っ伏すようにして倒れ込んだ兵士の無残な姿であった。戦闘の激しさを物語るかのように、敵も味方もどちらも路上に重なるようにして倒れ、血を流し息絶えていた。メフメット二世が馬を止め馬上から視線をやると、その先には仲間の流した血の溜りが広がっていた。この時コンスタンチノーブル独特の深紅の陽が傾き、赤い血の表面には細長い三日月と星が映し出されていた。スルタン(皇帝)・メフメット二世は、このときオスマンのために流された血を(使われた生命を)、永遠に忘れることがないよう、**帝国の旗を「赤地に三日月と星をあしらった」**ものにすることを決意する。

時が流れ 1683年の夏、オスマン軍団は2か月間にわたり、ウィーンを包囲する。この時、トルコ軍が焼いた三日月形のパンを、ウィーンでは軍が去った後も焼くようになる。それから約100年の時が流れ、この地・オーストリアを支配するハプスブルク家から、マリー・アントワネットがルイ16世のもとへと嫁ぐ。この時、三日月形のパンがフランスに伝わり、今日のクロワッサンとなる。

その後、500年間にも渡り栄華を誇ったオスマントルコも、次第に時代に適合できなくなり衰退していく。しかし、実際に帝国が解体するのは、第一次世界大戦後の1923年、近代国家としてトルコ共和国が成立した時である。それでは第一次世界大戦後に起こった、ケマル・パシャによる、オスマントルコからトルコ共和国への政変について物語ろう。

「地方創生」支援プロジェクト



(2) 「トルコ革命」という新しい物語 近代化、西欧化、世俗化

1918年10月、オスマントルコは第一次世界大戦に破れると、戦勝国のイギリス、フランス、イタリア、ギリシアは次々とトルコ国内に進駐、イスタンブールも連合軍の占領下に置かれる。優れた軍人であったケマル・パシャは、早くから青年トルコ党に所属し、政治面でも活躍する機会を窺っていた。そんな中、事実上の祖国滅亡を意味する条約にスルタンは調印してしまう。これをうけギリシア軍は勝手にイズミール地方の領有をはじめめる。その翌日、スルタンより残存軍団の撤退と治安回復を命じられたケマル・パシャは、軍艦に乗って出発する。

しかし、ケマルはスルタンの命に服さず、着いた先で幾つかの軍団の実権を握ると、国民に抵抗運動を呼びかける。

すると、連合軍の重圧に苦しむ国民は、これに呼応。ケマルも各地を奔走し国民会議を組織、本土防衛を呼びかけ臨時政府を樹立する。国内の多くを連合軍に占領され、しかもスルタン一派からは、命令に逆らったということで、ケマルは暗殺の危険に晒される。そんな中、ケマルは自身の軍事的才能と政治力を持って、国内を駆け回り必死の努力で国民の団結に成功する。さらに、ケマルは利害関係が対立し一枚岩でない連合軍側の弱点を見抜くと、各国相互の間に不信感を抱かせ離反へと誘導する。こうしてトルコの解体一歩手前まで進んでいた連合軍側は、一人の反乱軍人の鋭敏な頭脳と行動力によって、回天の軌跡を許してしまう。

具体には、まずケマルが、連合国内部にイギリスの野心を説いて回るとフランスが去り、続いて、イギリスを後ろ盾とするギリシアとの決戦になるが、これに勝つ。この勢いをもって直ぐさま、連合軍が占拠するイスタンブールに進軍すると、他の国は動くことができず、イギリスは撤退を余儀なくされる。そうしてケマル率いるトルコ国民会議は帝政を廃止、1923年7月には連合軍側と和平条約(ローザンヌ条約)を締結することに成功する。

○トルコ維新

トルコ大国民会議は共和国宣言を發布し、ケマル・パシャを初代大統領に選出する。ケマルは大統領に就任すると、矢継ぎ早に諸改革を断行する。即ち、①回教の聖位カリフの廃止、つまり**政教分離**である。イスラム裁判所も廃止した。そして②イスラム歴を太陽暦に改め、休日を金曜日から日曜日へと変更する。また、③公式の場で、女性が黒いヴェールで顔を被うこと、男性がトルコ帽を被ることを禁止する。さらに、④宗教関係者の教育参画を拒否し、国による**義務教育制度を確立**する。

そして1928年には、⑤「**イスラム教を国教とする。**」という**条文**を憲法の規定から削ってしまう。これは祖国防衛のためだけではなく、この国の近代化「**トルコ維新**」に向けた、ケマルの並々ならぬ強い決意の現れであった。ケマルは「我々はオスマン王朝下のイスラムの民なのではない。トルコ国民なのだ。」として、国民の感情は尊重しつつも、近代化目標に向かって進む決

「地方創生」支援プロジェクト



意を示す。事実、ケマルの執務机の上には、困難な状況の中、明治維新を成し遂げた明治天皇の写真が飾られていた。

ケマルは、一夫多妻制を禁止、**夫人の参政権**を認めただけでなく、**国民の識字率**を高め近代化へと導くため、難解な**アラビア文字を廃止**しローマ文字の**アルファベット**を採用、自ら各地の町や村を回って黒板に文字を書き、国民に文字を教えて歩いた。その甲斐あって国民の識字率は次第に上がっていった。ケマルは、やがて国民会議から**アタチュルク (国民の尊父)**の称号を授与される。

しかし、激務がこたえたのか1938年11月10日午前9時5分、アタチュルクはイスタンブールのドルマバッチェ宮殿で執務を取っている際中に、突然世を去ってしまう。アジアの国として、**トルコ国民の創生**をめざした、まだ若い政治家、国父アタチュルク57歳の死であった。トルコ全土が深い悲しみに包まれたことは言うまでもない。アタチュルクの戦友、右腕ともいわれたイノニュ首相は、臨時に招集された国会で追悼演説を始めようとした途端、涙が溢れ出てきて言葉にならず壇上で泣き伏してしまう。アタチュルクが最後の時を迎えたドルマバッチェ宮殿、ここにある100を超える時計の針は、今もアタチュルクの生命が途絶えた時刻、9時5分を指して止まっている。



ボスポラス大橋



マルマライ鉄道

(3)近代都市化戦略 都市のアクティブ化

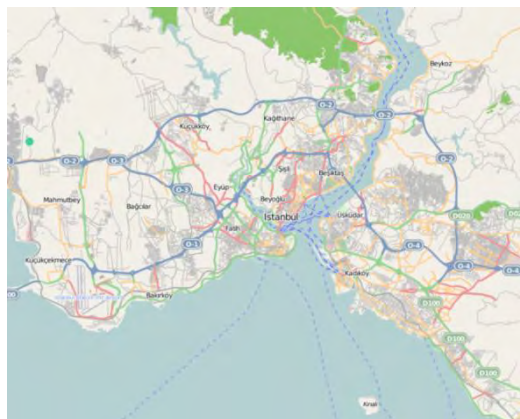
イスタンブールは、欧亜二つの大陸に跨がる大都市である。また、ユーラシア大陸を割き地中海からマルマラ海を経て黒海へと至る、世界で最も混雑する航路の一つ「ボスポラス海峡」は、ロシアと北アフリカとを海路でつないでいる。この海峡、アタチュルクの死から半世紀を経た1988年、日本の協力により(円借款)、第二ボスポラス橋が架けられる。これより前1973年には、ボスポラス橋(延長1,510m)が架けられ東西は合体していた。この架橋により**ヨーロッパ・ハイウェイ5号線**も開通、自動車交通の便が飛躍的に改善された。この二つの大橋に続き、これも日本の協力で2013年に**海底トンネル**が掘られ、**海峡横断鉄道・地下鉄マルマライ**が開通(所要時

「地方創生」支援プロジェクト



間は4分ほど)する。これ以前は、この海峡を渡るのにフェリーで30分もかかっていた。

近年におけるヨーロッパと中東そしてアジアを結ぶ、**高規格な道路網と鉄道網の整備**は、イスタンブールの近代都市化戦略の要で経済発展の軸となっている。この主要な交通路沿いなどには、近代的なオフィスやホテルまたマンションやショッピングセンターなどの立地が進み、場所によりオスマン建築とも融合し、さらに魅力的なまちとなってきている。そして東郊のベンデッキからは首都アンカラに向け高速鉄道も出ており、空の玄関アタテュルク**国際空港**は市街地の西22 kmの所にある。



交通輸送網



アクティビティを増す現代イスタンブール

また、昨今、黒海に臨み**新空港**の建設が進んでいる。この空港は7,650 haの敷地に2028年までに4つのターミナルビルが建ち、整備される6つの滑走路が年間1億5千万人の旅行者を捌くことから、現在、世界最大のアメリカ・アトランタ空港(発着回数95万回、旅客数9千万人)を抜き、**世界一の巨大空港**となる予定である。この他、鉄道・自動車(一方通行道路)両用の三層構造から成る、全長16 kmの**新しい海底トンネル**の工事も、2020年の完成をめざし進んでいる。

こうしてイスタンブールは、歴史都市としての重厚さだけでなく、イスラム世界の諸制度の改革を通じて近代化を果たすことで、新たな文明を取り入れ都市はアクティビティを高めてきている。そして近年は、陸運の便を求め、アジア側ではアンカラへと通じる国道沿いに、またヨーロッパ側ではエディルネへ通じる国道沿いに、日本企業も含め世界各国の近代的な工場の進出が進んでいる。一方、既存の中小工場は旧市街やシシュリ地区などに集積している。また、産業の隆盛に伴い海峡の両端のエミノニュ地区とカドゥキョイ地区では、貿易活動も活発化している。

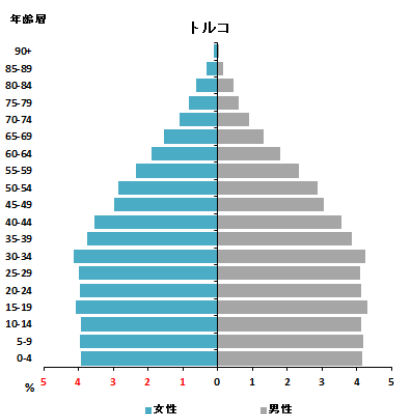
イスタンブールは元々観光業が繁栄してきたが、2010年に**欧州文化首都**に選ばれると、文化首都に相応しい文化プログラムを展開、すると欧州市民はもとより世界中から多くの人々が集い、観光や商業・交易業が大いに発展、またピラミッド型の人口構造を活かし、近代都市として金融、不動産、建設業なども隆盛、この地は新興国として経済発展を遂げるようになってきている。

ここにきてようやくトルコ革命の成果が目に見える形になってきた。このように日々パンを求める日常的な経済活動もとても大事だが、人の一生を超え後の世の人々の目にふれ語り継がれる

「地方創生」支援プロジェクト



ような、価値ある**独自性の高い文化遺構**や**魅力的な物語**を残す都市活動も、これまた大変重要なことである。悠久な時の流れの中に誰もまねできないような**固有な文化を刻み込んでいく**、このことこそがイスタンブールがもつ独自の都市価値なのではないだろうか。多くの人々が憧れる人間の生命を超越するような文化価値の創造、それこそが**究極の都市創生、クリエイティブな都市づくりの本質**といえる。



トルコの人口構成 2014



建設工事が進む新空港



鉄道・道路トンネル

コラム「日本とトルコの関係」

日本とトルコとの間には、不思議な縁がある。1890年（明治23年）9月16日夜、オスマン帝国最初の**親善訪日使節団**を乗せた軍艦「エルトゥールル号」が和歌山県の串本町檜野埼沖で台風に遭い折から強風と高波をうけ座礁、沈没してしまう。この時587名の命が奪われることになるが、この大惨事の知らせを聞いた串本町の大島島民の懸命の**救助活動**により奇跡的に69名もの人を救出することができた。

また、トルコは1905年に日本が宿敵ロシアのバルチック艦隊を撃破し、**日露戦争**で奇跡の大勝利を得たことを我が事のように喜んだ。この時トルコは、クリミア半島を基地とするロシアの黒海艦隊がボスポラス海峡を通過していくのを24時間ずっと見張っていた。以上、二つの話は**トルコの教科書に掲載**され、トルコの人々の間に今も**語り継がれている**事柄である。

それゆえ、イラン・イラク戦争最中の1985年、「48時間以内の猶予の後は全ての航空機を空爆する」との、イラク・フセイン大統領の布告を受け、イランのテヘランに取り残された200人以上の**在留邦人を救出**するため、トルコ政府は2機の航空機を派遣し戦火の中を飛行してくれた。これは和歌山沖の遭難救助の恩返しである。このようにトルコは大変に**親日的な国**なのである。日本人ももつとよくトルコのことを知る必要がある。よく知れば知るほど、アジア大陸の西と東の端に離れて暮らすトルコ人と日本人であるが、性質、行動等が実によく似ていることがわかってくる。

「地方創生」支援プロジェクト



参考資料

- 大島直政 「遠くて近い国トルコ」 中公新書 162 中央公論社 1968
- 那谷敏郎 「イスタンブール案内」 平凡社 1980
- 日本大百科全書(ニッポニカ)の解説 小学館 1994
- 小田陽一 中公新書「イスタンブールが面白いー東西文明の交流展を歩くー」 (株)講談社 1996
- 井上浩一 世界の歴史 11「ビザンツとスラブ」 中央公論社 1998
- 沖島博美・岩間幸司 旅名人ブックス「イスタンブール・西北トルコ」 日経 BP 社 2003(※印の図も)
- 松村明 大辞林 第三版の解説 小学館 2006
- ブリタニカ国際大百科事典 小項目事典の解説 2010
- 大村幸弘・永田雄三・内藤正典 「トルコを知るための 53 章」 明石書店 2012
- 調査レポート「イスタンブールスタイル」 日本貿易振興機構 2015
- <https://www.jetro.go.jp/>

掲載写真等

- ボスポラス海峡、黒海(上)とマルマラ海(下) <https://ja.wikipedia.org/wiki/>
- 東西、新旧の市街配置 <http://germantokuhain.way-nifty.com/>
- アヤソフィア <https://www.jetro.go.jp/>
- ビザンチン帝国の遺跡、洋の東西を結ぶルート、グラントバザール、コンスタンチノーブルの包囲網 ※
- オスマントルコの版図 <https://ja.wikipedia.org/wiki/>
- トプカプ宮殿 <http://www.ab-road.net/CSP/>
- スレイマニエ・モスク <https://ja.wikipedia.org/wiki/>
- ブルーモスクその内部 <https://retrip.s3.amazonaws.com/>
- オリエント急行 <http://www.jtb-grandtours.jp/>
- イスティクラル通り <https://www.jetro.go.jp/>
- イスタンブール都心部の歴史地区 <http://www.jttk.zaq.ne.jp/>
- ボスポラス大橋、マルマライ鉄道 <http://ameblo.jp/>
- 旧市街から新市街を望む <https://www.jetro.go.jp/>
- ヴァレンス橋 <https://zipantravel.com/>
- ガラタ塔 <http://123hdwallpapers.com/>
- グラントバザール、その内部 <http://tabisuke.arukikata.co.jp/>
- トルコ国旗 <http://freesozai.jp/>
- マルマライ鉄道 <http://ameblo.jp/>
- 交通輸送網 <https://ja.wikipedia.org/wiki/>
- トルコの人口構成 2014 <http://www.invest.gov.tr/ja-JP/>
- 建設工事が進む新空港 <http://tk-jp.blogspot.jp/>
- 鉄道・道路トンネル <http://synodos.jp/>

「地方創生」支援プロジェクト

